源氏と国境

issei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
源氏と国境

【Ｎコード】
Ｎ０４７８Ｌ

【作者名】
ｉｓｓｅｉ

【あらすじ】
御簾越しの恋は現代になりたつのだろうか。
ある日届いたＬＥＴＴＥＲ　ＯＦ　ＬＯＶＥＲＳ．
恋文とメッセージ、あまりにも個人の交流範囲が文明によって広がった反面、恋が失った感覚を呼び覚ます。

国境

携帯電話が蓄えている個人の軌跡は、およそ人体が持つ記憶容量を上回っている。
それが時に人の繋がりを決定的に断ち切る要因にもなるが、多くは孤独を嫌う人たちを仮想的に紐付ける巨大なライン工場になっている。
現実的に見れば、言葉の向こう側で思考を巡らす人たちが本心から他人と他人、その繋がりを大切に捉えているということは少ない。
どれもが使い捨ての乾電池のように、その個体が持つ魅力が損なわれた時点で優しさや愛情は途方もなく遠い空間に置き去りにされる。
最初からそのラインなど存在していなかったかのように。
「これはさすがにないでしょ。」
教室では古文の課題である源氏物語について各々がレポートを纏め上げているようだ。
音の無い声で先ほどからやり取りをしているのは教室にいる親友の田中美穂だ。
美穂はすでに先週末にそのレポートを学年で五指に入る学力で早々に完成させ、最高得点のミツバチスタンプをもらっているから時間を持て余しているのだろう。
「私に源氏物語を聞くなんて、釈迦に説法を説くようなものよ。」
そう彼女はレポートを纏めながら話していた。
私も提出済みだ、勿論ミツバチスタンプをもらっている。
しかし、私は「雲居の雁と夕霧」という人物の考察とその時代背景を美穂の言う通りに書き落としただけだ。
音の無い声が届くたびに屋上の床に置かれた携帯電話が淡いブルーに点滅する。
どうしても美穂は私に「彼氏」というステータスを持っていてほしいらしい。

自分にも彼氏がいないのに、様々な男の「表情」をご丁寧にメールへ添付してくる。
どうやればこんなに多種多様な男と知り合えるのか、屋上に上がってから四通目の「お見合い写真」が届いたようだ。
大きく広がる空が大好きだ、ゆっくりと時間が過ぎていく。
授業をサボっている優越感などは全く持っていない、一種の発作のようなものでこれを鎮めるためには小一時間空を眺めていなければいけない。
だから、親友からの着信色は大好きなその色に設定してある。
でも幾度も送られてくる「表情」の変化の無いこととといったらない。
誰もが、少し髪をワックスで弄ったようで、何枚撮り直したか解らないような表情で。
思わず私よりも写真映りを気にしているのではないかと疑うほどに斜めからフレーム内へ絶妙に収められている。
この写真家たちと恋愛する位だったらこの空と雑談していたほうがずっと楽しそうだ。
それに、親友の顔を立てるのにメールを続けるのはもう嫌気がさしている。
試しに何度か自分でも驚くほどに可笑しな化粧をして相手に写真を送信したことがあったが、決まって相手からの返信はなくなっていた。
そして美穂にメールが届くのだ。
「さすがにないでしょ。」と。
すべて顔で判断しているとは言わないが、あまりにも失礼だとは思う。
そう言った出会いを否定しているわけではないが、その写真までの歯が浮くような優しさがやはり偽りなのだと行き着くまでに時間は掛らなかった。
いままでの私の彼氏は、美穂いわく動物園らしい。
ゴリラにキリン、ライオンにカンガルーとどれも愛らしいはずの動

物たちの名前が当てはまるという。
そういう美穂の彼氏は確かにかっこいい人物が多かったが、総じてどの人も私には例の写真家たちにしか見えなかった。
終了を告げるチャイムが響く、大きな空には最後まで雲ひとつない。
同時に私は美穂に「彼氏候補無し。」のメールを返信して購買へと向かう。
今日は新しい菓子パンの発売日だ、コンビニにいけば買えるのだが学校の購買で、という部分が非常に魅力的なのだ。
「あっ、こっちだよ。」
美穂だ、すでに購買で新しいパンを二つ手に持っている。
「はい、あんた今日誕生日でしょ、お祝いにあげるよ。」
そうだ、すっかり忘れていたが今日は私の十七回目の誕生日だった。
「すっかり忘れていた、ありがとう。」
「さすがに覚えておきなさいよ。」
今年の誕生日プレゼントは苺のクリームと板チョコが入ったパン二つだ。
ちなみに去年は、十本で二百円というお買い得なボールペンの束が三個だった。
お陰さまでこの一年ペンには困らなかったが、それを貰った帰り道の鞄は重たかった。
「うん、美味しい、朝ご飯を抜いてきて良かった。」
たぶん、誕生日を覚えていてくれたのは美穂だけだろう。
こんな風に祝ってほしい訳ではないが、やっぱり少しは祝われたいと思ってしまう。
「私から見たらそのパンは毒物にしか見えないけどね。」
「美穂はから党だから残念だね、この美味しさが解らないのだもん。」
苺の粒粒感まで再現されているこのパンは、すでに私的ランクに殿堂入り確実だ。
「別に解らなくてもいいの、私にはキムチや唐辛子の美味しさのほ

うが魅力的だから。」
そう言って、美穂は持ち歩き専用の七味を取り出すと購入したシーチキン御握りに振りかけていた。
「邪道だね、まさに。」
「いいの、きっとシーチキンもこの奇跡の出会いを喜んでいる。」
校庭は夏の日差しを目いっぱいに受けて、砂漠のように乾いていた。

あいつはまたあんなところで。
三年校舎は二年校舎を見下ろす形で建設されている。
だから、この学校で一番高い場所にある三年校舎の屋上からは全てが見える。
校庭、中庭、一年校舎と二年校舎、そしてそれぞれの屋上スペース。
送ったメールに気がついたのか、こちらを見上げて手をあげた。
「あそこにいるの、妹さんだよね。」
斎藤菜穂が視線を移しながら聞く。
「そうだよ、一応。」
妹、といえば響きはいいがあいつは妹というより男友達という印象がいまだに抜けない。
サバサバしているというか、世間で言う「妹萌え」とは掛け離れた性格だ。
「可愛いよね、彼氏とかいないのかな。」
可愛い、か。
確かに初めて母親に連れられて逢ったときは、妹ではなく異性として見掛けた事もあったが一緒に暮らし始めてすぐにその感覚はなくなっていった。
「メールきているよ。」
ん、携帯電話の液晶には「あほ」と名前が出てきている。
「ちゃんと名前で登録してあげなよ。」
「いいのだよ。」
携帯を開く、するといつも通り菜穂がメールを覗きこんでくる。

昔の浮気をまだ疑っているのだ、信用してもらうためには仕方がないが少しだけ踏み込まれたくない部分にまで入り込まれている気もする。
…今日の夕飯カレーにしてね、夕日見ていたら食べたくなった。
曜日で分担している家事、今日の夕飯係は俺だった。
…却下、今日はシチューにします。
メールを返信して菜穂を見ると、少し怪訝な表情をしている。
「どうした。」
「別に、じゃあ支度もあるしもう帰らないとね。」
絶対になにか疑っているようだが、それもいつもの事だ。
「今日、一緒に夕飯食べるか。」
「いいよ、この前も御邪魔したばかりだし。」
こういう問答を少しだけ面倒に感じる。
俺と妹の仲を疑っている訳ではないのだろが、本当の「兄妹」ではない部分へ女性として引掛りを感じているのだろう。
「大丈夫だよ、二人分も三人分も変わらないしさ。」
たぶん、菜穂と食べたいと言えばよりいいのだろうがそれは言いたくなかった。
嘘ではないが、この状況でそれを言うことは正解ではない気がしたからだ。
一瞬考えた後に菜穂は、ありがとうとだけ言った。
帰り際に、二年校舎を見渡すともう人影はなくなっていた。
…今日、菜穂も夕飯食べにくるから。
一応メールだけは入れておく。
校舎を出るとすぐに返信が届いた、携帯が淡いブルーに点滅する。
…今日は、やだ。
菜穂が教室に忘れ物を取りに戻っていて良かったが、あいつが誰かを拒絶するなんて滅多にない、それに菜穂が先週同じように夕飯を食べに来たときはこんなこと言わなかった。
それにメールも菜穂がいやなのではなくて、今日がいや、だ。

喧嘩のもとにしたいわけではないので、とりあえずメールは削除する。
すると、また携帯が光った。
…送り間違えただけだから、気にしないで。
送信ミスか、それなら気にしなくてもいいだろう。
「お待たせ、どうしたの。」
菜穂が下駄箱から声をかけてくる。
「いや、夕飯のメニューを考えていた。」
「リクエストがあったじゃない。」
「そうなのだけどさ、バイト代も入ったからケーキでも買っていこうかと思って。」
「いいですね、指定校推薦で大学が決まっているひとは余裕があって。」
菜穂の皮肉は耳にタコが出来そうなほど聞いている。
「そう言うなよ、三年間頑張ったから少し休憩しているだけだよ。」
本当は、たまたま推薦が取れただけだ。
それでも充分に高学歴な大学だ、正直入学していいのかと思っている。
「でも、どうしてケーキなの。」
これは、まずい展開になってしまうかもしれないが嘘をついても仕方ないだろう。
「誕生日なのだよ、妹の。」
「それならさ。」
何を話し始めるかと思ったが、どうやら喧嘩の種を危惧する必要はなかったようだ。
やっぱり苺ケーキでしょ、そう言って笑う菜穂はいつも通りの表情だった。
あいつ、俺が誕生日を忘れていると思っているのだろう。
少しだけ、驚くあいつの顔を思い浮かべると何故か懐かしい感じがした。

あっという間に夏は終わり、気がつけば衣替えの季節だった。
その過ぎていく季節のなかで唐突に、そして鮮やかに、限りなく現実の世界から遠い場所から彼は現れた。
きっかけは、なんて事のない「会話」だった。
…ｗｉｌｌ　ｙｏｕ　ｇｏｉｎｇ　ｏｕｔ　ｗｉｔｈ　ｍｅ．
画面上に表示された言葉はあまりにも直球で、およそ日本人の男性には表現できない感情が埋め込まれていた。
美穂から送られてくる見合い写真の相手のような、厭らしさもなければ几帳面に女性を煽てるような手際もない。
…ｉｆ　ｙｏｕ　ｃａｔｃｈ　ｍｙ　ｗｏｒｄ，　ｐｌｅａｓｅ　ｓｅｎｄ　ａ　ｍａｉｌ．
自慢ではないが私の英語の評価は十段階で下から数えた方が早い。
送られてきたメッセージの日本語訳は当然、美穂に頼むことになった。
「これって、誰から送られてきたの。」
興味津津の美穂に説明するのは少しだけ面倒だったが、和訳をお願いしているからには話さなければいけなかった。
「美穂に登録されたＳＮＳサイトだよ、あそこからメールがきたわけ。」
ふうん、という具合に和訳を進める美穂は続ける。
「でもあのサイトからのメールを見るなんて珍しいね、そのひとかっこいいだね。」
「写真はないよ、そのメールが来ただけ。」
それは本当だった。
別に英語の文章に惹かれた訳でも、海外からのメールに興味を持った訳ではない。
ただ、サイトの自己紹介欄に書かれた一文に惹かれたのだ。
…ｔｈｅ　ｌｅｔｔｅｒ　ｏｆ　ｌｏｖｅｒｓ．
どういう経緯で日本の私へこのメールを送ってきたのかは解らない。
しかし、その一文は私の心に鮮明に残ったのだ。

「終わったよ。」
美穂は印刷された「手紙」をひらひらさせている。
「どういう意味。」
「ん、簡単にいえば恋文だよ。」
焦らすようにするのは美穂の癖だが、どうしてわざわざ古風な言い方をするのか。
「だって、あのサイトの自己紹介欄は美穂が日本語で書いたやつなのに。」
「別に、日本語なんて読もうとすれば誰でも読めるよ。」
それに、といって「手紙」を渡してきた。
「私が沙紀の恋のキューピッドかもね。」
恋って、これはそういう感情ではない。
自己紹介欄の一文と、このメールの内容が知りたかっただけだ。
だから、特にこのメールへ返信もしていないし、これからもするつもりもない。
「とりあえず、返信しようよ。」
「別にいいよ、手紙の内容も解ったことだし。」
「だめ、沙紀がこういうことに興味を持つことはキリン以来なのだから。」
ほら行くよ、そういって美穂はカフェの席を立ちあがった。
今日は土曜日だ、兄の誕生日プレゼントを買いに来たつもりがどうしてこうなったのか。
駅で切符を買い、電車を待つ。
美穂の家とは二駅しか離れていないから、自然と遊ぶ時間も長くなった。
それがこの関係になった一番の理由かもしれない。
それ以外でも美穂は私にとって掛け替えのない親友ではあるが、こういうときの行動力にはなぜか逆らえないものがある。
「今日さ、沙紀の家に泊まってもいい。」
電車は横浜駅を通り過ぎ目的地に向かっている。

「いいけど、今日は私が夕食の当番だから帰りがけに買い物もしていくからね。」
「やった、これでお兄さんと仲良くなれたら嬉しいし。」
美穂いわく兄は相当かっこいいらしいが、私にはそうは思えない。
初めて逢った時から異性を意識させない、いい人だった。
「行くよ。」
保土ヶ谷に着くと、駅前の大型スーパーではなく近所の商店街で買い物を済ませる。
なぜなら、今日は商店街で買い物をするとポイントが三倍つく日だからだ。
「沙紀って何だかんだ言っても、すっかり主婦だよね。」
見合いばかりを勧める姑をしり目に夕飯の材料を選んでいく。
今日は兄の好きなグラタンの予定だ、私の誕生日のお礼も兼ねている。
あの日、美穂以外に私の誕生日を祝ってくれる人がいるとは思っていなかった。
菜穂さんまでが、わざわざプレゼントを用意してくれていた。
「今日知ったから簡単なもので悪いのだけど。」
そう言って渡されたものは、とても簡単なものには見えない江戸切子のグラスセットだった。
思わず貰った私が恐縮してしまったが、兄から菜穂さんのお父さんは代議士をしているとの話をその時に思い出した。
「夕飯の支度まで時間あるでしょ。」
家路の途中で美穂が切り出した。
「あるけど、メールの返信は夕飯のあとだからね。」
「なんで解ったの。」
美穂はなにか企んでいる時に、右手を鳴らす癖がある。
たぶん無意識のもので本人は気がついていないだろうけど、気がついてしまえばこれ程解りやすい癖はなかった。
「ただいま。」

「お邪魔します。」
単身赴任している父親のもとに母親が付いて行っている、そんな状況は正直面倒くさくもあれば楽でもある。
金銭面で困る事は殆どないし、こんな風に親友が泊まりに来てもまったく問題がないからだ。
兄はここぞとばかりに遊び呆けると思いきや以外にも、小さな父親のようにきちんと、突然の予定がない限り家の用事を済ませて帰宅している事が多かった。
菜穂さんも一度だけ泊まりに来た事があるだけで、それ以来泊まることはなかった。
「お帰り、早かったね。」
リビングから声聞こえる。
「うん、今日美穂が泊まっていくから。」
襖を開くと何やら小難しそうな資料を広げて、レポートを兄は纏めていた。
「すみません、忙しい時にお邪魔してしまって。」
「ん、大丈夫だよ、もうすぐ終わるから先に着替えてきなよ。」
そう言うと兄はまた資料の束に目を向き直した。
「前と同じでいいよね。」
「うん、ありがとう、それより平気だった。」
兄の事を気にしているのだろう、元々あまり表情に変化がないひとだ、あの状況では怒っているように見えたのかもしれない。
「平気だよ、いつも通り。」
二階の自室に上がり、ジャージとスウェットを取り出し片方を美穂に渡す。
「そっか、なら安心した。」
ジャージに着替えながら、美穂は可愛いパジャマを今度買ってこようと呟いた。
そこからは、ただ淡々と日常が流れた。
夕食の準備、食事、そして美穂の不必要な程の兄の持ちあげ話しだ。

「少し早いけど、今日美穂と一緒に選んだから良かったら使って。」
まさかのグラタンに加えて、このサプライズに兄は本当に驚いているようだった。
「おお、ありがとう、美穂ちゃんも選んでくれてありがとう。」
一杯食わされたな、そんな事を言いながらリボンを解く兄を美穂は最高に可愛いと言っていた。
少し値は張ったけれど、大学生になる兄へＴｏｍｏｒｒｏｗ　Ｌａｎｄの万年筆を贈った。
兄はそのペンを見るやいなや、小さなメモ用紙に「ありがとう」と試し書きをした。
「いや、やっぱり嬉しいプレゼントだからいつもよりも巧く字がかけるね。」
「いつも通りだよ。」
こんなことしか言えない私は可愛くないのかもしれない、美穂ならなんて言うのだろう。
そんな事を考えているうちに玄関のチャイムが鳴った。
「菜穂だよ、あれ、メールを送らなかった。」
驚いているのは私よりも美穂の方だ、まさかの真打登場といった具合だろう。
携帯を見直すと、確かに夕方兄からメールが届いていた。
もしかしたら帰りの電車のなかで圏外になったときに送られてきていたのかもしれない。
「どうしたの、今日泊まっていくの。」
「泊まりっていうか、ちょっと待っていて。」
兄は玄関に向かって歩いて行った、美穂が脇腹を小突く。
「私がいても平気なの、っていうか先に言ってよ。」
美穂は少しいじけているようだが、遠慮することなど一つもない。
「気にしないでよ、それに菜穂さんにも美穂の話ししてあるし。」
「えっ、それって何を。」
こんな美穂を見るのは久しぶりだ、少しこのままからかって置くの

もいいかもしれない。
「こんばんわ、沙紀ちゃんお邪魔します。」
リビングに兄が菜穂さんを連れて戻ってきた。
いつ見ても可愛らしいという言葉が似合うひとだ、今日は白と黒のワンピースに薄い紅色のジャケットを羽織っている。
ええっと、と菜穂さんが考え込んだ処で兄が口を開いた。
「沙紀の親友の美穂ちゃんだよ、ほら武勇伝の。」
「あなたが美穂ちゃんね、色々と楽しい話しを聞いているわ。」
「武勇伝…んっ、ああ、初めまして、あの、宜しくお願いします。」
「そんなに改まらなくても、そうだ、菜穂さん、今日は泊まっていくのですか。」
ソファに腰を掛けた菜穂さんにお茶を手渡す、グラスは当然江戸切子だ。
「あれ、隆から聞いていないの。」
兄は笑いながら計画変更、と叫ぶとどこからか大きな包みを取り出した。
開けてみ、という風に頷くと私にその包みを寄越した。
中には反物が、それも淡いブルーと濃紺が自然と溶けあい、その上に白梅が鮮やかに散りばめられ、その袖口になるだろう部分には真っ赤な紅梅が一点ずつ線が引かれた、夢の織物が入っていた。
「どうして。」
言葉にならなかった、美穂はその突然の出来事に驚きながらも目の前の着物の美しさに目を奪われているようだった。
兄は得意げに話し始めた。
「まさか俺へのサプライズもあるとは思わなかったけど、これさ、親父とお袋からプレゼントだよ。」
お父さんと、お母さんからの贈り物っていうこと。
「そう、生産が間に合わなくて誕生日は過ぎちゃったけど、少し早い成人式用の反物にだってさ、前に親父たちに着物の話しをしていたのだろ。」

涙が零れているのを美穂に指摘されるまで気が付かなかった。
忘れられていると思っていた、自分から伝えるのは癪だったから特になにも言わないでいたのに。
「ちゃんとお礼の電話をしとけよ、今日だと向こうでは朝の忙しい時間だろうから明日にでもさ。」
頷くだけで精いっぱいだった、こんなに自分自身でも嬉しいとは思わなかった。
海外に行ってしまってから、数か月に一度母親が帰国するだけで父親には殆ど逢えていない。
それでも、覚えていてくれた事がどうしようもなく嬉しかったのだ。
そして、と言って兄はまたごそごそし始めた。
これが俺と菜穂から、そして…。
「これが私から。」
美穂だった、さっきまで突然の出来事にあたふたしているように見せていたのは演技だったのか。
「これどういう。」
状況がまったく解らないのだ、嬉しい事には変わりないのだが少し頭が追い付いていない。
それに菜穂さんからは、とても「高価」な簡単なものを以前に頂いている。
「沙紀にちゃんとしたプレゼントを渡せていないなと思っていたら、親父からこの反物の事を聞いて、だったらもう一度合わせてお祝いするかって。」
兄に続いて菜穂さんが話す。
「それで、その着物に合う髪飾りを私と隆で選ばせてもらったの。」
言われた通り中には上品な色遣いの髪飾りが一式収められていた。
「そして、ついに私の出番。」
美穂が待っていましたとばかりに話し始めた。
「お兄さんに一週間前に呼び出されて話しを聞いてね、私からのはそんなに高価ではないけどお揃いだから良かったら付けてほしい。」

美穂から渡された包みの中にはハワイアンジュエリーのリングが入っていた。
「ほら、去年沙紀から貰ったリングを三日で無くしちゃったでしょ、だから。」
なんて幸せなのだろうと思う。
これ以上に幸せを望む事は罰があたりそうな気さえする。
だから、美穂はあの時夕飯の前にメールを、と話していたのか。
あれは興味があった事以上にこのサプライズに向けての一つの準備だったのだろう。
いつの間にか立場が逆転してしまった祝いの席で、感謝で埋もれた涙と鼻水を抱えながらあの時に、美穂が話した「恋文」の意味を私は考えていた。

「だから言ったでしょ、夕飯の前がいいって。」
美穂と夜を楽しく過ごすためのお菓子を買いに行った帰り道だった。
とはいっても、から党の美穂が買うものは、スルメにチーズ、かきの種とおよそ高校生が好んで選ぶものとは思えないものばかりだ。
私は、相変わらず砂糖がたっぷりと使われた甘いお菓子で、美穂からすれば同年代にも関わらず若気の至りだというものだ。
「だって、あんなサプライズがあるとは思いもしなかったから。」
「そうだけどさ、とにかく家に帰ったら返信するからね。」
…Ｌｅｔｔｅｒ　ｏｆ　ｌｏｖｅｒｓ.
突然に届いた電子メール、きっと何かの間違いで私に届いたのだろう。
仮に必然で私に送ったのだとしても、例えば彼が抱いている幻想のなかの私と現実のなかの私にはきっと落差がある、だから、あのメールに書かれていた優しさや愛情は必ず消えてしまうに決まっている。
何を期待している訳ではない、それでも何かを期待してしまうような今の環境がいやで仕方がないのだ。

家に着いた私たちは、兄と菜穂さんに頼まれていた飲み物を渡して自室に戻った。
兄が準備してくれたのだろう、部屋には既に美穂の分の布団が敷いてあった。
「気が利いて、かっこよくて、そして優しいなんて最高のお兄さんだね。」
パソコンの主電源を入れながら美穂が話す。
「本当にさ、変な意味じゃないけど私だったら恋しちゃいそうだもん。」
「それは、義理でも兄妹になった時点でそういう主観はなくなるよ。」
一人っ子の美穂にはその感覚が解らないのだろう、怪訝な顔のままサイトにアクセスする。
受信ボックスには新着のメッセージが三通届いていたが、どれもがあのメッセージの送り主からではなかった。
三通のどのメッセージにも顔写真が送付され、自分が如何に暇であり、優しいかが丁寧に説明されていた。
そしてきっとこのメッセージに返信したらこう返ってくるのだ。
…君の顔写真も送ってほしい。
「この人だよね、趣味が…Ｃｏｒｒｅｓｐｏｎｄｅｎｃｅ，ｏｒ ｒｅａｄ ｔｈｅ ｈｉｓｔｏｒｉｃａｌ ｎｏｖｅｌ ｏｆ Ｊａｐａｎ．か。」
美穂は英語で書かれた自己紹介欄を難なく読み解いていく。
まるで日本語の自己紹介欄を解説してくれているようだったが、次第に美穂の呼吸が荒くなっていくのが解った。
回転式の椅子に座ったままで、体だけをこちらにくるりと向ける。
「本音を言えば私が連絡したい位だけど、これは沙紀に来たメールだからね。」
私のためにメモ書きしてくれた和訳版の自己紹介欄を渡す。
名前はジャック、私よりも二つ年上のケネディ州の大学に通う学生

で、二度来日したことがある、その時に見た京都の街並みに心を打たれた…。
趣味は、成程、だから美穂は…。
「美穂、あなたが連絡すればいいじゃない。」
不貞腐れた一人っ子ほど面倒なものはない。
スルメを噛みながらコーラを一気に飲み干す姿は十年後の美穂を容易に想像させた、きっとコーラがビールや日本酒になっているのだろう。
「どうして。」
「だって、この趣味なんて美穂とだから繋がるものじゃない。」
スルメを口の中に入れたまま美穂は、話す。
「確かに沙紀のプロフィール書いたのは私だけど、その彼が言っているのは共通の趣味の他にも理由があるもん。」
そう言って、美穂はメッセージが和訳された紙の一番下の部分を指さした。
…表情が解らないからこそ、きっと僕はこの手紙を君に送ったのだ。
「沙紀よく話していたじゃない、結局誰もが外見だけでしか判断していないって。」
確かにそう思っているが、この彼だって同じかもしれない。
「彼はそういう沙紀だからこそ連絡してきたのよ。」
「どういうことなの。」
美穂はいつの間にか食べ終わっていたスルメのゴミを丸めると、ゴミ箱に放り投げた。
「昔はね、御簾越しにしか女性を見る事が出来なかったの。」

「それって得意の源氏物語のことだよね。」
そう、と言って美穂はチーズに手を伸ばした。
そのまま開封すると、裂けるチーズを裂かないで口に放り込んだ。
「だから、手紙によって、つまり恋文ね、恋歌っていうのだけどその一通一通をやり取りして相手の事を思い描いていったの。」

きっとこの子はストレスをため込んだら太るタイプだな、そんな事を私は考えていた。
「このメッセージはまさにそれなのよ、今そんな気長な事を出来る人はなかなかいないわ、出会おうと思えば、そう、出会う前に写真を見る事も声を聞く事も出来る、それに、昔と違って出会いの幅が広がり過ぎているの。」
「美穂を見ていれば、解るわ。」
「でも、沙紀はそういう出会いは好まないでしょう、ある意味で古風なのよ。」
下の階から、兄と菜穂さんの笑い声が聞こえてくる。
如何わしい事をしないでくれると、妹としては嬉しいが介入するつもりはない。
「ちゃんと、聞いている。」
見透かされたようで、反射的に「はい。」と返事をしてしまう。
「だからね、そういう沙紀の言っていた事を書いておいたのよ、プロフィールに、それを見て連絡をくれたの、彼は。」
急に下の階が静かになった、この話しが聞こえていないといいが。
「つまり、私と彼は御簾を潜ろうとすれば出来るのにしない、そんな恋愛観が合っているということね。」
「そう、今は御簾が国境だったり、人種の違いだったりするのかもしれないけど、別にすぐに恋愛対象とする必要もないと思うけれど、連絡してみるのも有りじゃないかな。」
よく聞いていれば、こんなに熱く物事を語る美穂は久しぶりにみた気がする。
最後に美穂は、源氏物語のことならいつでも教えるからと言ってまたチーズに手を伸ばした。
親友がここまでいってくれて、私はどうするのだろう。
しかし、気が付けば私は美穂の変わり回転椅子に座り直し、キーボードに手を置いていた。
「さ、英語の授業をお願いします、先生。」

これからの夜は少しだけ熱くなりそうな気がした。

国境（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
今後ともよろしくお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0478l/

源氏と国境

2010年10月11日05時50分発行